

人間の根源的暴力性の記憶

六車由実著

民俗学の供御人身を喰う

「人身御供」という禁忌に荷した領域に、若くみずみずしい感性と論理で果敢に取り組んだ姿勢にまず大きな拍手を送りたい。テーマの奇抜さのみならず、本書の内容や語り方は従来の静謐的な民俗学の枠組みから確実に一歩を超え出ている。

表題はややグロテスクに聞こえるが、読み始めるとすくに納得される。各地に伝承されている人身御供譚(たん)や動物犠牲を伴う祭りの分析を通して、人間の内なる根源的な暴力性の記憶が呼び覚まされてくるスリリングな展開に思わず息をのむ。

供犠(食人)という疑問は、著者の言う通り、それを論じる者の置かれた時代状況ばかりか、論者のイデオロギ―をも如実に映し出す鏡のようなものだ。大正末期、皇居の地下から発見された十六体の「人柱」事件。かつて大森貝塚から発見されていた食人骨以上に、それは私たちに傍観者から当事者へと内在化する視点の転換を迫る。その事件から説き起こされる本書は、事件の背後に潜む「謎」を解くミステリ―としても読める。

柳田国男が、原日本人の食人風習について、初めは自覚的に説きながらも次第に実在論から民衆の心意問題へとすり替えていった経緯を著者は突く。また、それを共同体の秩序更新装置の面しか見ない現代の人類学者にも批判的だ。そのような「毒抜き」された理論から見失われてしまったリアルな「毒」を回復すべく、赤坂憲雄や中村生雄らによる根源的暴力論に寄り添い、それらの批判的再解釈を試みようとする。

人から獣、魚、穀類へというイケニエの歴史的な置き換えや、神饌(しんせん)を食べることによって神との一体化を図るといふ神人共食論が述べられる終章は特に興味深い。論旨の着地点はいまだ十分に明確でないところがあるにせよ「人、神を喰う」への転回の今後を期待したい。東北芸術工科大東北文化研究センター研究員・六車由実のこの博士論文は、他学へと越境し、知の逆流現象を誘発するだろう。まさに新鮮な「贅(にえ)」の出現だ。

〈評〉久保田力・東北芸術工科大教授

(新耀社、二五〇〇円)

